

ご支援いただいたみなさまへ

お父さんたちのネットワーク

石垣政裕

支援のご報告No.21

ー牡鹿半島の小さな浜に集会所ができたことー

炊き出しの縁から

以前書いたように、私たちおやじの会の面々は、東北大学大学院経済学研究科の学生・留学生たちとタッグを組んで牡鹿半島にある小さな浜、給分浜の支援を開始しました。炊き出しの時の話し合いの後、なんとか旧保育所跡に集会所を作りたいとの話を受けて、ほぼ1ヶ月後の8月25日、私たちはまた車に分乗して、給分浜に向かいました。

整備する部屋の状態がわからないので、とりあえず石垣が名取でボランティアをしながら覚えた瓦礫片づけ用具のスコップや一輪車、軍手などを積んでいきました。

保育所の跡地に入る

旧保育所跡はほとんど風が自由に通り抜けるほど、ガラス戸がなくなっており、壁が打ち破られている。そのときまで壁面を飾っていただろう楽しそうな絵や張り紙が汚れたまま壁に残っています。天井の扇風機にかぶせられた黄色いビニール袋に水が残っている。そこまで津波が押し寄せたのでしょう。

10人ぐらいの私たちのグループは、保育室の整備までは手を出すより前に、まずは道路の脇を流れる側溝を整備しようということになりました。浜の災害対策本部の安藤さんの話では、雨が降ると側溝が流れないのでどうしても園庭に水がたまってしまうということでした。側溝のふたは丈夫で重かったのですが、中国からの留学生は身体を張って持ち上げ、側溝に詰まった瓦礫を取り除き始めた。ほんとうに彼らは一生懸命なのです。「こういうのは勉強より得意」と笑わせながら、『どぶそうじ』を進めていく。



瓦礫を取り去っただけの保育所跡



整備をするはずの保育室



炎天下、ものすごい悪臭

石垣のこころは、締め付けられるようです。日本に勉強しに来ている彼らが、泥まみれになって、側溝から河原や衣服ガラスのかけら、あらゆる物を取り除いている。彼らが取り除いているのは瓦礫ではない。日本人と中国人の壁なのだと思う。

たった数メートルを1日かけて『掘り』進んだ。水が流れたのを確認してこの日の作業を終えた。側溝だけで長さは今日の4倍はある。途方もない作業が残っていました。

果てしない作業で見えてきたもの

10月16日。前回、整備する部屋の寸法を予め測っておいたので、とりあえず壁をふさいだりする材木などを仙台北バプテスト教会から借りた軽トラックに積んでいった。資材は久原おやじの会（東京都大田区）や以前気仙沼での自転車の支援をいただいたカメラア会（スイス・イタリア）、私たちを元気づけてくれた第12回福岡おやじサミットなどから寄せていただいた支援金で購入しました。

石垣宅には前の晩からスイス人のミケーレ・アンドレアさんがこのボランティアのために泊まり込んでいましたし、福岡のおやじの会から嶋田正明さんものり込んで来ています。ううむ、これは「大事」になりそうです。



千葉親方



作業前のミーティング

「大事」の予感はずかしく当たっていました。未明のものすごい雨。雨具を来て軽トラックにシートをかぶせに行ったのですが、すっかり濡れてしまいました。しかし、ミケーレと軽トラックに分譲し、給分浜に着き作業を開始する頃には雨も止んでいました。

急遽「内装部長」になった千葉さん（稲井オヤジの会）は、さすがプロの仕上げを見せつけてくれ、石垣などは「石膏ボードの積み方が悪い」と『教育的指導』をいただきました。現場のいろいろな仕事を留学生に仕込んでくれましたが、千葉さんと留学生のやりとりが実に面白いのでそちらの方に気をとられてしまいました。



プロは服装から違う

大鍋の仙台芋煮と「さきにしき」の新米でおにぎりまで用意してくれた照井さん（鹿島台おやじの会）。その照井さんの芋煮の作り方を盗もうと作業開始を虎視眈々と伺っているのは福岡の嶋田さん（福岡、壱岐おやじの会）。八乙女おやじの会の佐々木さんは、壁にぽっかり空いた大きな穴の補修の責任者。自分と同じぐらいの細さの中心柱を立てて

います。イタリア国境にすぐ近いスイス人の助っ人ミケーレさんはみんなと楽しく話しながら仕事をこなし、最後には「今日の経験はうれしかった」と深夜バスで帰っていきました。



床と壁の正装と消毒

東北大の国際交流室に集まった日本人学生、留学生は力がある。何日かかるか分からないとオヤジたちが口にしていた側溝掘りも1日でやってのけた。内装親方の千葉さんもたいしたもんだと褒めていました。親方千葉さんに褒めてもらえば本物です。丁寧に集会所を掃除し、壁の汚れを落とす。壁の穴にボードを貼り、他の部屋に残っていた窓枠を集めてきて枠にはめ、次第に部屋の形を作っていきます。

彼らは最後のあと片付けまで手を抜かないところがすばらしい。

おやっ？嶋田さんとミケーレからは酒の臭いがする。ドブからウイスキーの瓶が2本出てきたのだそう。栓がしていたから大丈夫とすでにいい気分になっています。あのドブからですよ。

参加した人たちはブルガリア・キルギス・ベネズエラ・スイス・中国・福岡・鹿島台・稲井・八乙女・西中田……。中央アジアから南米といろいろな国からなので、いろんな言葉が飛び交う1日でした。

浜の人たちも顔を出して下さって、差し入れまでいただきました。

それぞれの創意工夫で集会所予定所（旧保育所）は見違えるようになりました。また、側溝が機能しはじめたことで園庭の整備がしやすくなると思います。早く、地域みなさんがここに集まれるといいなと思います。私たちの支援は集会所の整備を通して、地域のコミュニティの支援へと少しずつ傾いていきました。



浜はまだこんな状態



ササニシキのおにぎりと芋煮

とくと仕上げをご覧ください

私たちには自分たちのチームにKKS082「国際交流支援室＋おやじ」という名を付けました。

おやじたちには道具もあり、腕もあり、料理までする。留学生・学生には力があ

り、知識があり、情熱がある。これががっぷり四つに組めば大抵のことはできる。私たちKKS082はそれを立証しつつありました。



パンチカーペットをはる



脚立?



こんなにも立派な！



参加者の笑顔

11月23日

私たちは最後の仕上げに、給分浜に向かいました。今回はシュツツガルトの大学生の森川志信君が横浜から来仙しました。

私たちのこの支援活動はまた、他の多くの方々から支援をいただいております。ここまで名前を出してきた方々はもちろん、第9回全国おやじサミットin熊本、大分市おやじネットワーク、大分市立明野西小親父部。フルーティストの杉谷美香さん（横浜）は他の音楽家の方々と何どもチャリティコンサートを開いては、お父さんたちのネットワークのこの支援活動を支えて下さっていますし、他の方にも有形無形のたくさんの支援をみなさんからいただいております。

この日は、折しも仙台の芋煮のシーズンということか、いや、だいぶ時期は過ぎたのですが、鍋の共演ということになってしまいました。いつものようにシェフ照井がカレーうどんと鍋、石垣は奥さんに助けを請い比内鶏のスープを用いたきりたんぽを、東北大の末松和子先生は石狩鍋をつくりました。

私たちは、少しずつ少しずつできあがっていく集会所を見て来ました。近くにある仮設住宅の集会所だけでなく、みんなが集まれる空間がコミュニティのには必要だと思っています。石巻市は周辺の町を合併して大きな町になりました。行政区域が大きくなればきめ細かなサービスが行き届かなくなる嫌いがあります。牡鹿半島の小さな浜のコミュニティ復旧は仮設住宅ができた時点で終わっているわけではありません。

もちろん、この私たちの試みだけでは何ともならないことはジュージュー知っていることですが、冷たい潮風の吹きすさぶ小さな浜が生き生きとまた海の生活と伝統を取り戻す、そのときこそほんとうに日本が復興したと言えるかも知れません。

明けて1月22日お披露目

前日の大雪で交通が混乱していました。仙台市青葉区川内の大学の前に向かえに来ていただいたマイクロバスも高速道路の入り口で引き返す羽目になったのですが、それが幸いして、自車でいくことをあきらめた学生・留学生一行をピックアップすることができました。なにが幸いするかわかりません。私たちはマイクロバスに料理の材料から鍋、コンロまで詰め込み、一般道路を一路鹿島台に向かいました。バスの中は顔なじみのメンバーに二人の腹話術師、小野靖子さんと伊藤むつ子さん。二人は腹話術の会★きずなの会員で、今日のために特別に来ていただきました。それに岡山大学の小河秀樹先生。八乙女おやじの会の佐々木さんもここで同乗しました。佐々木さんなら出発際に「発射、ドウジョー」というおやじギャグを言うかも知れませんが、この日は朝から道中の困難が予想されたため、誰の同情も得られないと思ってか、少し静かにしています。

鹿島台に着いた時はもう10時近くになっていました。ここで、鹿島台おやじの会の照井さん、鳥塚さんが乗り込み、さらに焼き鳥やら生ビールやらの道具を積み込みました。

鹿島台から県道16号線を東に走り、JR石巻線稲井駅へ向かいました。さすがに石巻は温かい。仙台ではあれほど積もった雪がほとんど無いのです。稲井駅では稲井オヤジの会のメンバーが乗り込み、マイクロバスは酸欠になるかというほど満杯状態でした。

結局、予定より1時間遅れて給分浜に到着しました。すでに浜の方々や、新座子育てネットワークの佐野育子さん、北九州市立大学の恒吉紀寿先生は遅い私たちの到着を待っていていらっしゃいました。

リベンジなるか

7月の炊き出しの時に、自分たちのおいしい餃子を食べてもらいたかったと話していた中国の留学生。この日は旧正月のお祝いの日ですが、あえて参加したという意欲は準備の時からしっかりと周囲に伝わりました。しかし、三々五々集まってくる浜の女性の方と一緒に餃子を作る姿はほほえましい。結局おいしさの問題ではないんだなあ。

外では佐々木さんと石垣が焼き鳥を焼き、照井さんが中華鍋でお好み焼きを作っています。この辺りはおやじの臭いがプンプンとしています。まさか、その臭いにつられてきたのではないでしょうが、浜に人たちもだいが集まってきました。考えてみれば、とっくにお昼時を迎えていたのです。



できあがった集会所で

隣の大原浜の方々トラックで薪と炭、それに竈（かまど）まで持ってきてくれました。火を焚くとオヤジ度がぐーんとアップします。

餃子は大変おいしくできました。もうリベンジを通り越しています。焼き鳥も飛ぶように出て行きます。飛ぶ鳥ではないのですが・・・。生ビールが食欲を誘うのでしょう。試行錯誤の中華鍋製のお好み焼きだってたいした物です。

腹話術

食後、小野さんと伊藤さんの腹話術を楽しみました。この日のためにずいぶんネタを仕込んで来て下さったようで、次から次へと笑いのネタを披露して下さいます。原発のネタもあったのだそうですが、現地に合わせて今回のプログラム構成にしたとおっしゃっていましたが、いつか見てみたいと思います。子どもからお年寄りまで屈託なく笑うこと、これが一番私たちが目指してきたこと。それができたことで、私たちに次の支援の勇気が湧いてくるのでした。

みなさんからいただいた支援金でストーブも発電機で灯るLED電球も机も座布団も購入し、やっとこの日を迎えることができました。



腹話術で笑いました



ケロちゃんと握手

オヤジ交流会

その場に浜のおやじさんたちに残っていただき、参集したおやじの会のメンバーと少しアルコールも入れて話をしました。いま浜での親父さんたちの現状や希望、悩みなどについて話し合いました。仮設住宅ができて、若い人たちは仕事を求めて石巻や仙台に行く。前のような仕事（ここでは養殖が盛んであった）ができない。慣れない仕事に出ているなど、解決されない問題が山のように積み上げられています。この問題は重機で瓦礫を運んでいくようには解決されません。それでも、被災地の支援は物資の支援もさることながら、コミュニティの再構築のお手伝いなどという大言壮語は忘れて、ややもすると孤立しがちな小さな浜の親父さんたちとの小さなネットワークの芽ができあがったことがなによりうれしいのです。

今回の行事はNPO法人新座子育てネットワークから「お父さん支援員活動助成」を受け実施することができました。また、東北大学大学院経済学研究科国際交流支援室、いつものように横浜の杉谷美香さんとコンサートにおいてのみなさまからご支援いただきました。感謝申し上げます。

終了後、浜の方々から「また来て欲しい」と言葉をかけられました。私たちがいつか「お客さん」でなくなる日が来るでしょうか。

この集会所も含めた保育所跡の建物は、3月で取り壊され、その後の計画はないそうです。浜の遠藤さんは少しすまなそうにおっしゃいました。二次災害を防ぐためということらしいです。行政は何一つ「地域に寄り添った」ところから出発しません。とりあえず面倒なものはまっさらな土地にして、そこから計画を立てようなどと考えているのかも知れません。その土地にどれだけ人びとの心が残されているか、おしはかることはできません。わたしたちの活動は、役所の仕事とは対極にある、行政にはできないそのことこそ大切にこれからも続けて行く必要があるのではないのでしょうか。